

RadioDays



ラジオデイズ
声には、
人の体温があり物語がある

月刊「ラジオデイズ」8月号 (通巻第15号)
2008年7月28日発行
[発行人] 赤塚祐一郎
[編集人] 大森美知子
[発行所] 株式会社ラジオカフェ
東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル6F
Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281
http://www.radiodays.jp

8

August Edition
2008, vol.15
Free of charge

この人の声が聴きたい◎8月 瀧川鯉昇さん (落語家)

高座の魔法使い または鯉昇的昭和



はじめて鯉昇師匠を見たのは、赤坂で催された小さな落語会だった。演目は「船徳」。若旦那の徳さんが危なっかしい槽さばきで操る猪牙船が大川でぐらぐら揺れる。鯉昇落語では、見事な語りと絶妙な身体芸によって物語の空間が「そこ」に出現する。小船のローリングやピッチングがこちらにも伝わってきて、座っていたパイプ椅子まで揺れた。

鯉昇師匠は一九五三年、静岡県浜松市のお生まれである。私よりひとつ下。団塊世代の尻尾にあたる。しかし、あの風格はそのように見えない。敗戦直後の焼け跡闇市、洲崎パライスや鳩の街、下手をすると日華事変もリアルタイムでご存知ではないかと思わせる。師匠、ごめんなさい。

でも、言いたいのは、「老けて見える」ということではなく、瀧川鯉昇という一流の噺家から立ち上る濃密な昭和前半の匂いなのです。

鯉昇師匠は、マクラの中でよく落語の「意味」についてさらりと語る。曰く、「落語は人生の教訓になるようなものではないんです。噺家ってのは、どこかで聞いたようなハナシをただ忘れないうちに喋っておこうという心持でやっているんであります。間違っても『発言に責任を取れ』というようなことはおっしゃらないで下さい。落語は人生の休憩時間みたいなものでございまして、ペン持って紙に何かメモとってや

ろうなんてのはダメなんでございませ……」このあたりの発言には、高度成長以後、「効率」とか「効能」という追求のものの考え方に傾いてしまった「昭和後半」に対する「昭和前半」のやりわりとした批評がある。もうひとつ。

八代目小柳枝師匠に食べられる草の見分け方を教わったというのは有名な話だが、鯉昇師匠は貧乏話を通して、「昭和前半の寓話」を語り続けているようなところがある。壊れかかった家電製品の話がそうだ。

ラジオデイズ落語会でかけていた「へっつい幽霊」には、窓から入る微風に逆回転してしまうという扇風機が登場した。ご自身の談話によれば、部屋の中をぐるぐる動いて四畳半を一周すると一時間が経過する。これはもう寓話を超えて魔法の世界である。

鯉昇落語は本編ももちろん面白い。古典に無駄なものも付け加えていないが、江戸の物語は現代に持ち込まれてそれ自体で弾けている。その卓抜な再生力も、独特な昭和前半的感性に支えられていると思えてならない。

それは永遠の休憩時間から人生を眺めているような感覚である。変化する人や時代をやりすごし、欲得を洗い流していくうちにその魅力はそれのようなくところにある。

(ラジオデイズ・プロデューサー 菊地史彦)

ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。

飄逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにたえる魅力的なコンテンツが満載です。

ただいま入会随時受付中!

会員(会費無料)になられると、期間限定の無料コンテンツがお楽しみいただけます。サイトでは、声の魅力を凝縮したコンテンツのすべてを試聴できるほか、演者のプロフィールやコラムなど読み応えも十分です。どうぞお立ち寄りを!

<http://www.radiodays.jp>

対話の街からは、内田樹のダイアログ・シリーズをリリース。小林秀雄賞を受賞された気鋭的思想家・内田樹氏と、悪ガキ時代からの盟友ラジオデイズのプロデューサー・平川克美とともに、絆々たるお客をお招きして語り尽くします。ただいまは脳医学者の養老孟司さんとの対談「概念化する世界の読み方」の第一回、音楽家の大瀧詠一さんとの対談「大瀧詠一的」の第一回が無料ダウンロード中。音の旅「小糸ん・遊遊の大井川鐵道SL列車の旅」も登場です。

文芸の街からは、作家の関川夏央さん、小沢昭一さん、詩人の清水哲男さんなど多彩な解説者を迎えた「声のエッセイ」コレクションが評判。また、「声の詩集」シリーズからは、女優鳥丸せつこさんの朗読、詩人の正津勉氏がナビゲートする『詩人の愛』I・IIをお届け中。女優有馬稲子さんの朗読の『水仙』も新登場。さらに本邦初となる落語家・入船亭扇辰師、柳家三三朗朗読による江戸弁で聞く落語調「ゴリ」『外套』『鼻』も新発売。詩人の小池昌代さんのコラム「言問い小路」も好評連載中。

話芸の街からは、ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源百五十本余をお届け中。時代に磨かれた古典を自家薬籠中に現代に演じきる噺家たち。そして、時代の流れから湧き出た、かつて語られたことのない新作に鑄を削る噺家たち。ライブ音源だけに一期一会の斬に出会えます。不定期ですがラジオデイズイチオシの噺家さんの演目を無料ダウンロードにて提供していきますので、毎日覗きにきてみてください。まずは、試聴ボタンを。

オリンパスシンクする寄席

【日時】8月23日④午後6時45分開演（午後6時15分開場）
【場所】お江戸日本橋亭

すべての落語は新作として生まれ、生き残ったものが古典になる……。それを自家菜籠中に演じきる現代の噺家たち！ 人情の機微に触れ、免疫力増進の涙と笑いの宝庫、至福の話芸の真剣勝負。毎回二人の演者が二席ずつ競演します！

五街道雲助

（ごかいじゆう・くもすけ）

十代目金原寧馬生に入門。昭和四七年、二ツ目昇進と同時に「五街道雲助」と改名。五六年、真打昇進。いまは演じ手の少なくなった圓朝噺、廓噺、怪談噺にも積極的に取り組む実力派の大看板であり、聴衆を惹きこむ独特の語り口にも熱狂的なファンが多い。



桃月庵白酒

（とうげあん・ぱいしゆ）

五街道雲助に入門。平成一七年、三代目桃月庵白酒を襲名、同年第十回林家彦六賞を受賞。二十年には花形演芸会銀賞を受賞した気鋭の若手である。趣味はポタリング、音楽映画と幅広く、作務衣の似合う柔和な風貌と温もりのある声質とは裏腹な辛口の洞察力が聞き手を惹きつける。



明烏い話

連載第16回



本田久作



枕で政治の話をする噺家がいる。ネタとして面白ければこちらはただただ笑って聞いていればよいのだが、困ったことに時に客を笑わせるのを忘れてただひたすら真面目に語る人がある。しかもそういう噺家に限って、語る内容は床屋談義の域を出ない。そういう時私は声には出さずに腹の中で「芸人風情が天下国家を論じるんじゃない」とつぶやく。

「芸人風情」とは芸人を見下して言う言葉である。私はこの言葉に込められた差別的な語感が好きでよく使うが、近頃の人は蛇蝎の如く差別を憎むため、こういう侮蔑的な言葉は決して口にしようとしな。私はといえば、芸人はしよせん芸人風情だと思っているから、こちらが客である限り芸人を無意味に尊んだりはしない。

小三治は東京の落語界で最後に残った名人で、小三治がいなくなれば東京では落語史上はじめて名人不在の時代が訪れると私は考えている。その私が友人知人と小三治について語る時は小三治のことは「小三治」と呼び捨てにする。小三治さんでもなければ、ましてや小三治師匠なんぞではない。それは小三治が芸人で、芸人はしよせん芸人風情だからである。もちろん私だとしてもしも小三治と会う

機会があれば、小三治さんもしくは小三治師匠と言うだろう。ついでに「うへー」とへりくだるだろう。さん付けもしくは師匠と呼ぶのは、そうするのが人間の礼だからである。へりくだるのは内心ひそかに小三治の芸に惚れているからだ。面と向かい合えば、人と人である。相手が高座にこちらが客席にいれば、芸人と客である。自ずと礼は変わってくる。ちなみに申せば文章を書いて生業を立てている人もまた言葉を操る芸人である。とりわけ落語に關してもを書き、それで金を稼いでいる者は噺家に寄生しているのだから芸人以下である。だからこの世は士農工商芸作家だと私は常々言っている。

私たちは子どもの頃、スポーツ選手を呼び捨てにしていた。王と言ひ、長嶋と言った。「長嶋さん」と呼ぶ者はいなかった。いたとすれば長嶋の知り合いぐらいのものだが、そういう人でも友だちと話をする時はやはり長嶋と呼び捨てにした。長嶋さんとさん付けで呼べば、あいつは長嶋と知り合いだということを自慢しているのだ、と馬鹿にされる。長嶋はやはり長嶋と呼び捨てで呼ばねばならない。私たちはおさな心に漠然とながらも、スポーツ選手もまた芸人の一種であることに気づいていたのである。

開演前の寄席の客席で若い男女が何やら話をしてる。聞くともなしに彼らの会話は私の耳に入る。男が女に志ん生の落語がどれほど素晴らしいかを講釈している。それはまあかまわない。男が知ったかぶりといひけらかしが好きな生き物であることは、男である私が身を以て承知している。けれども若い男が志ん生のことを志ん生師匠と呼ぶのは面妖である。不愉快ですらある。あなたは志ん生のお身内の方ですか、と聞きたくなるが、これ

は言うまでもなく嫌味である。そして嫌味は相手に通じないとこちらの溜飲が下がらないので、私は言いたいことをぐっと堪えることになる。志ん生が師匠ならば、円朝のことは大師匠と呼ぶがいいと腹の中で悪態をつく。

ただ困るのは噺家と話をする時で、もちろん私ですら最低限の礼儀は身につけているから、相手のことは○○さんもしくは○○師匠と呼ぶ。それはよいのだが、彼らとの会話の中で志ん生文楽をどう呼んでいいのか私はいまだに迷っている。噺家はためらうことなく志ん生師匠文楽師匠と言っているのに、私だけが無理に志ん生と呼び捨てにするのは無礼である。だが、しよせん客でしかない私が馴れ馴れしく志ん生師匠と呼ぶ方がそれこそ無礼ではないかという気もする。そしてそういう現代の噺家たちも明治の名人たちの話になると、円朝円喬と平気で呼び捨てにする。現代の噺家にとって円朝はすでに歴史的存在だからだ。ところが、これがひと時代下ると話がまた変わってくる。円生の残した文章を読むと、円生は円朝のことをやはり円朝師匠と呼んでいる。そして円生が円朝のことを師匠もしくは大師匠と呼ぶ時、そこには自身が円朝に連なる身であることの誇りが感じられる。今の噺家は円朝のことをなかなか円朝師匠と呼べないだろう。円朝のことを円朝師匠と呼べるのはある種の特権なのだ。そしてこうした特権は現在でも活かしている。私は小三治のことを小三治師匠と呼べる人を羨んでいる。

●ほんた・まうさく

一九六〇年大阪府生、ライター。二〇〇二年の「仏の遊藝」が国立演芸場日本舞臺佳作受賞以来、落語、漫才など新作日本舞臺の賞を毎年総ナメの業界巨匠の新進作家、主な受賞作「玉手箱」（国立演芸場日本舞臺優秀作）、「唄の葬式」(按摩の夢)、「幽霊番長」(いずれも落語協会優秀賞)など

こみちが行けば

女流二ツ目の修行日乗⑭

柳亭こみち



入門したての頃、師匠が正しい挨拶の仕方を伝授してくれた。挨拶ごとき？ と人は思いかも知れないが、発声、お辞儀、目線のすべてに気をつけるとなかなか難しい。さらに噺家の風習では、目上の方を見送る際は姿が見えなくなるまで見届ける。私が挨拶の稽古に励んでいたある日、新幹線に乗る師匠を見送った。元氣よく「行ってらっしゃいませ」。深々と頭を下げ列車が走り去るのを見届けた後、私の携帯に師匠からメールが届いた。「今の挨拶は良くできた」。

ところが入門して4年経つ頃、師匠が言う。「お前の挨拶はいつもワンパターン。ただ元氣よく言やあいってもんじゃない。挨拶の状況は様々だ。その場の空気に合わせて、ある時は小声で、ある時は微笑んで、ある時はおじぎだけだ。いい。何百通りもの挨拶ができるようになるれ。言われる相手の気持ちを考えて表現を変えられるのが、噺家だ。挨拶にもレベルアップが必要なのだ。

そんな折、ある若手真打を駅のホームで見送った。「じゃあね、お疲れさん！」、快活に手を振ったその方は、走り去る電車の中で私に見送られながらその方の姿が見えなくなる直前の瞬間に、顔を一発、一人になった私は笑いが込み上げた。なるほど。挨拶もツワモノとなるこんな芸当があるのか。

挨拶は実に奥深い。

●こみちについて

社会人生活を経て、平成15年柳亭燕路に入門。18年11月二ツ目昇進。趣味はピアノ、ギター、ウクレレ演奏。特技は日本舞踊。五妻流名取（吉妻春美）。落語協会野郎部・チームR所屬。

味な脇役・話芸のきまり文句

連載第15回

男



松井高志

「厩火事」というかなり有名な落語があり、この噺には、「男とはこういうものである」という意味のフレーズが随分たくさん現われる。耳で聴くより速記を活字で読むと、さらにその印象が強まる（つまりこれは、諺のたぐいは落語の中にさりげなく引用すると、本などで押しつける場合よりも抵抗なく人に受け入れられるということの意味している）。

具体的には、八代目文楽の口演を例にとれば、まず冒頭で、

男は敷居をまたげば七人の敵がある

という諺が引用される。「男子家を出ずれば七人の敵あり」ともいうが、「男は社会へ出て働く上では、多くの敵がある（有形無形の苦勞が絶えない）」の意。「家庭から出れば、常に緊張感を持つものだ」ということである（今時社会に出ているのは男ばかりではない、と揚げ足を取れば諺の立つ瀬がない）。これは他にも多くの落語に出てくるのだが、大抵男にはいろいろつき合いたいというものがあるのだから、いざ表へ出るときに懐具合が心細いようでは困る、という意味に使われている。

他にも、「どんな亭主でも男だから」男は立てなくちゃいけませんよ」「女は女らしくしろ」など、今ではクレームがつきそうだなかなか生で聞けないフレーズも出てくる。いっぽう講談の方で、「男」について「な

るほどね」と思わせるフレーズというところ、思いつくのは「天保六花撰」に出てくる按摩・数の市のセリフ。ちよつと長いが覚えておいて損はない。

素人の娘なんているものは、かんざしを買ってくれた、親切な人だ、半襟を買ってくれた、気前のいい人だ、そんなところへほれるんだが、くろうこのほれるのは男の真実、これがほんまの男の色男さ。

そういえば、「厩火事」の仲人も、「男は腹だよ」と言っていたっけ。

●まい・たかし

一九〇〇年愛知県生、月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に「人生に効く！ 話芸のきまり文句」平凡社新書。など。四月に、落語、講談筆記に出てくるあて字・難読語をドリル形式にまとめた刊「コナンドク（難読漢字自習帳）」(バジリコ) が発売された。「話芸・きまり文句」辞典 サイトは <http://vageidom.cooclog.jp/>

私の讃大ばなし 拾五

橋家圓太郎

『試し酒』

酔う加減の難しい噺だと感じたのですが、エディ・マーフィーの「大逆転」という映画を見たときに、これだ！ と思いました。粋な旦那衆の遊びなのです。そこが難しい噺なのです。で、今は適当に酔っばらっています。いや、適度に。

『菟菟問答』

「寺は古いが……」と、延々と続くいたてを短くしました。袖で聞いている師匠の小朝が「なんで詰めたの」「ウケるところじゃないし……」「そんな見なら噺家やめなさい」と破門になりました。何度も破門になっています。

『富久』

子供の頃にラジオで聴いた先代馬生師匠の「富久」。ピューっという北風が耳に残っています。だけど、この音源にもピューっという音はありません。でも、聞こえたのです。たしかに聞いたのです。僕は当代の馬生師匠にお稽古していただきました。

ラジオデイズ二周年記念イベント 秋から続々登場です！

昨年9月14日のサイトオープンより、ご愛顧いただき、誠にありがとうございました。感謝の気持ちを込めまして、9月から落語をはじめ、トークなど多彩な一周年記念イベントを続々と開催いたします。

一周年記念特別対談三連発

「本日、戦後表現者論で」機嫌を伺います。」

【会場】浜離宮・朝日小ホール 【料金】4000円
【日時】9月28日⑧ 午後3時開演 午後2時15分開場

●第一部 戦後落語家論

「円丈以前と円丈以後」の言葉があるとお、三遊亭円丈の出現はひとつの革命であった。そこに、落語日本の貴を総なめにしている落語作家本田久作がからむ。落語ファン待望の新作落語黎明期の真相話が炸裂。

三遊亭円丈 VS 本田久作

●第二部 戦後詩人論

戦後作家の中心的存在であり鋭利な批評家でもある高橋源一郎が、生粋の詩人にして川端康成賞の小説家でもある小池昌代と現代詩について語り合う。この異なる文芸魂の衝突はいかなる化学反応を巻き起こすのか。

高橋源一郎 VS 小池昌代

●第三部 戦後マンガ家論

養老孟司が京都漫画ミュージアムの館長であることを知る人は多くない。小林秀雄賞受賞の現代思想家内田樹も少人数に一家言を持っている。このふたりが日本のオリジナルのサブカル文化を縦横に、辛辣に語り合う。

養老孟司 VS 内田樹

【お問い合わせ】ラジオデイズ・03-3333-4111-1130

東京音協・03-3333-0181-16

この公演の予約は東京音協のサイトやチケットぴあからお願いいたします。お馴染みシンクスの寄席の「プレミアム」、大塚浩「プロデューサー」の「さわつけ落語会」も開催！ 詳細は次ページをご覧ください。

ラジオデイズ一周年記念

きわめつけ落語会(天友浩ラヂオース)

【会場】お江戸日本橋亭 「本戸」 2500円
【時間】午後6時半開演(午後6時開場)

●9月2日◎

桂文生(馬の田楽)

古今亭志ん橋(藪入り)

柳家小里ん(五人廻し)

※ご予約申込受付中! ラジオデイズURL <http://radiodays.jp> もしくは、予約受付専用電話〇三―三三三―四一―三三〇より、先着順です。

オリンパスシンクくる寄席

【会場】お江戸日本橋亭 「本戸」 2000円
【時間】午後6時45分開演(午後6時15分開場)

●第16回 9月17日◎

二遊亭白鳥 林家さく磨

※ラジオデイズURL <http://radiodays.jp> もしくは、予約受付専用電話〇三―三三三―四一―三三〇より、先着順です。

ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、深夜のラジオ番組も制作・放送しています。
お相手は、ラジオデイズプロデューサーの平川克美、菊地史彦、大森美知子、そして大阪は140Bの辣腕エディター江弘毅が務めます。これまでの放送分は、ラジオデイズサイトにストリーミング放送中。さらに、ポッドキャストでも配信です。どうぞ真夜中の語らいに耳を傾けてみてください。

<http://www.radiodays.jp>

今後の放送予定(深夜のお客様)

- 8月5日 村井 勝(元コンパック日本法人社長)
- 12日 木村政雄(ラヂオプロデューサー)
- 19日 浜崎 健(アーティスト)
- 26日 田坂広志(シンタックスファイナンス代表)

文月の落語会三つ

第13回ラジオデイズ落語会(7月5日)は

瀧川鯉昇・三遊亭遊雀両師匠の登場。満員札止めの盛況です。開口一番は瀧川鯉斗さん。ネタは「動物園」。若人らしい軽快なテンポに先が楽しみ。続いて遊雀師匠は「堪忍袋」。最近の遊雀師匠は図抜けていて、何でも面白い。鯉昇師匠は「へっつい幽霊」。売れるがすぐに返品になるへっつい。実は幽霊が出るという。初めゆるく段々の大騒ぎは、師匠の得意芸、笑わずにはいられません。仲入り後は、遊雀師匠で「四段目」。芝居好きの丁稚、子供が出てくれば師匠の独壇場、忠臣蔵芝居ファンも吃驚、オチへ向かってまっしぐら、抱腹絶倒の定吉でした。トリは鯉昇師匠で「質屋庫」。質屋の蔵に幽霊が出るとの噂、このままでは店の評判が悪くなる、番頭と熊五郎が寝ずの番。師匠の飄々とした感じとビビリまくり慌てふためく登場人物たちのギャップが面白さを倍加する。

同日夜は、第2回ラジオデイズ若手

新家の会。出演は五街道弥助、三遊亭

好二郎、春風亭一之輔、三笑亭朝夢と

いう実力派。トップバッターは朝夢

さん、ネタは「転宅」。インテリ風

の落語好き、若々しいが隙のない

芸は今後が楽しみ。次は一之輔さんが

「青菜」。オウム返しで退屈な新だが、

落語好き四十余年の拙僧もこんな面

白い青菜は初めてだ。仲入

り後はこの秋真打ち昇進の

好二郎さんが登場。ネタは

「浮世床」。多様な登場人物を演じ分け、浮世床を現代に蘇らせてくれました。トリは弥助さんで、ネタは「らくだ」。雲助師匠譲りの噺っぷり、骨太な芸は未来の名人候補かも。

第14回オリンパスシンクくる寄席(7月16日)

は古今亭志ん五、古今亭志ん橋の兄弟会。前座は柳亭市朗さんでネタは「芋俵」。続いて志ん橋師匠が登場。「鰻の期間」でケチな奴に自腹で一杯食わせられる野だいこを好演。続く志ん五師匠は「風呂敷」。ばかばかしく平和な噺も志ん五師匠はダダでは済まさない。仲入り後も志ん橋師匠で「無精床」。懐かしい噺を聴きました。トリは志ん五師匠で「抜け雀」。志ん生、志ん朝と受け継がれる古今亭正統派の得意ネタ。本寸法の巧み面白さに、志ん五師匠独自の味が出て大笑い。ラジオデイズ必見、いや必聴! 乞うご期待!
(ラジオデイズ寺和尚)



オリンパスシンクくる寄席の"楽屋口(〇〇)"

シンクくる寄席オリジナルコンテンツ"楽屋口(〇〇)"が携帯電話からお楽しみいただけます。



まずは、左の2次元バーコードを携帯のカメラで写してあらかじめ無料画像認識アプリ Sync ★R (シンクくる) をダウンロードしてください。

QRコードを撮影、または a@gwmj.jp (オリンパスのシンク★Rの公式サイト) に空メールを送信すると、ダウンロード先 URL が記載されたメールが返信されてきます。つぎに、Sync ★R (シンクくる) アプリを起動して、各ページにあるマークを携帯のカメラで撮影して保存・送信すればOK。オリンパスシンクくる寄席のチラシのマークでもラジオデイズのお楽しみコンテンツをお楽しみいただけます。※このとき、それぞれのマークの全体が入るように、ピントが合うところまで離して撮るのがスムーズにダウンロードするコツです。どうぞ、お試しあれ!

シンクくる (Sync ★R) とは?
オリンパス株式会社の開発による、先進の画像認識技術に応用したカメラ付き携帯電話用アプリのこと。新聞・雑誌などの紙面やテレビ画面上の画像を撮影するだけで、モバイルサイトへのアクセスを可能にします。

ラジオデイズの窓から

梅雨も明け、猛暑続きの毎日ですが、御苑の散策路を歩いて出勤すると、木陰を通りぬける風が心地よく、一瞬ですが、癒されます。さて、ラジオデイズは、皆様のおかげで、サイトオープンから、まもなく一周年を迎えます。日頃の感謝を込めて、落語会はもちろん、対談などの様々な記念イベントを来月からご用意しております。ぜひお越しください。

